

研究テーマ	[ I 素材（材料や用具，場所など）と出会い，かかわること] 材料の特質を生かし，様々な材料から発想を広げる授業の工夫 － 中学1年生 【「感動の箱」を作ろう】の実践を通じて－
-------	--

常総市立水海道西中学校 横島 均

1 研究テーマについて

紙粘土という素材は，可塑性に富み自由な形に仕上げることができる。また，乾燥すると固まって形が保持できる。着色ができるなどの長所がある。しかし，特別な紙粘土を使わない限り，紙のように薄くのばしたり，細い針状にするのは困難である。また，ガラスのような透明感は表現できない。我々の身の回りにあるものを全て粘土で表現することは困難である。また，表現力の稚拙な生徒にとって本物そっくりという目標は，目標が高すぎてかえって制作意欲を低下させる原因にもなる。そこで，中心となる材料は紙粘土であるが，紙粘土で表現できないものは身の回りにある不要品を利用したり，パッケージや包み紙などは実物を使いながらも本体は紙粘土で制作するなどの，材料の使い方を工夫させれば，色々な素材を生かし写実的に表現できたことの達成感を味わわせることができる。

2 実践例

(1) 題材 「感動の箱」を作ろう（ボックスアート・半立体表現） 中学1年生

(2) 題材設定の理由

感動は誰でも経験したことがあり，それを人に伝えたい，人に理解してもらいたいという欲求を持っている。その欲求を目的に変えることにより，発想の手がかりにしたいと思い，本題材を設定した。昨年度は，感動したものを人に伝えるように風景を制作するという実践をしたが，対象が抽象的過ぎて形にならない生徒もいた。そんな中，ケーキがおいしくて感動したとの理由でケーキを粘土で表現した生徒がいた。漠然とした「感動」より「おいしそう」という感動の一点に絞れば，発想の苦手な生徒にも何か作れるのではないかと考えた。また，日本には「サンプル食品」という製品があり，日本独特の文化として外国にも認知されている。TV番組等でも取り上げられることがあり，興味のある生徒も多いと考え本題材を設定した。

(3) 題材観

本題材では箱という限られた空間を利用することで，蓋を開けると感動が見えるという状況を想定して制作する。また，底・脇・蓋といった面も利用させ，広がりある空間を表現できる題材としたい。材料においては色が塗り込められる紙粘土を使用し，微細な制作にも対応できるように工夫する。また，紙粘土以外にカップ・トレイ・スプーンなど重くないもの，壊れにくいもの，変質しにくいものを使用可として，使い方を工夫することで作品をより写実的な表現に近づけた。

(4) 指導観

本題材は，「感動」という心情的風景をジオラマ的に表現する題材である。個々に持っている感動したことの思い出や記憶は個人差が大きいので，個々の思いを生かすための助言に配慮したい。また，抽象的な題材にすると戸惑う生徒も多いので，素材を「食べ物」に限定して箱の蓋を開けたときに写実的で「おいしそう」という感嘆の声が出るように指導したい。絵画的表現の苦手な生徒や美術を苦手としている生徒には，技術的な表現より制作途中での思いつきや発想の大切さを理解させ，興味・関心の持続と高まりを支援したい。

(5) 授業の展開と工夫

①題材について知る

生徒たちを教卓の近くに呼び寄せ，その場で参考作品（先輩の作品）の蓋を開け鑑賞させる。開けた瞬間に中身のリアルさに感嘆の声が上がることが多い。生徒達に，食べ物で感動した記憶はないか訪ね，その記憶を人に伝えるものを制作して欲しいと題材に関する興味を喚起する。

②箱を作る

- ・蓋のある箱の中に作品を制作させることは，開けた瞬間の感動という目的意識が発想の目標や意欲につながると考えた。(写真①②参照)
- ・箱の深さは5cmしかない。この深さの中に制作し，蓋が閉まることを条件としている。そのため生徒達はどうすればこの深さの中に作品が入るかを考えなくてはならず，それも発想を広げる要素になっている。
- ・「型」を使って一人一人が同じ箱を作るので，制作手順を教え合いながら共同意識を持たせつつ，何を作ろうかの会話の中からライバル意識の芽生えや発想のきっかけになった。  
(写真③参照)
- ・同じ規格の箱にして保管しやすく，箱に記名することで自分の作品を見つけやすくした。  
(写真④参照)



(写真①↑) ※手前の展開図は箱を作る型



(写真②↑) ※箱の型を写している様子



(写真③↑) ※箱の組み立ての様子

- ・表現力を膨らませるために、紙粘土以外に使うものを考え準備させる (プリント①下参照)

ガラス容器などを紙粘土で制作するのは困難である。そのため、自分で用意できるもので、高価でない、時間で変化しない、壊れにくいことを条件に紙粘土以外のもので廃物等を材料として利用することを勧めた。それらをどのように使うかを考える発想と、持ってきた材料から作るものを発想させるなど、発想の広がりを目指した。

また、箱の厚さが5cmしかないので、用意した材料をそのまま利用できない場合が多い。そのような場合の発想の転換を促すために、カップラーメン等の容器を例にして、色々な角度から「切る」という方法を見せ、切り方によっては新しい表現があることを気づかせた。

- ・プリントの利用

プリント①としての表の上側には作品のシチュエーション、表の下側には材料、裏には下絵(底と蓋の図案を考える)を描く用紙を、一枚用意した。

- ・アイデアスケッチを描く

箱の底に作品を並べるだけでは作品の「おいしさ」を十分に表現できない。ふたは、広げれば地面の延長として表現できるし、立てれば壁としての表現も可能である。蓋と底の両面の情景を考えれば、より食べ物の置かれた情景をより分かりやすく説明することが可能である。それによ

### ③ 構想を練る

- ・シチュエーションを考える

おいしかった思い出を形にするためには、食べたものを写実に作るだけでなく、食べた場所や季節、誰と食べたか、などが大切な要素になる。生徒達は「おいしそうな食べ物」と設定すると「食べ物」に意識が偏り、食べ物はリアルに作ろうと努力するが、粘土作品の回りを考えずに制作してしまうことが懸念された。食べ物だけをどんなに写実的に作っても食べ物の回りが殺伐としていては、おいしく見えない。そこで、言葉でシチュエーションを考えさせた。「いつ」「どこで」「誰と」といった場面を考えさせることで、どんな背景がふさわしいか考えるきっかけになった。そして、食べ物だけでなく思い出も振り返ることができ、楽しく制作することができたと思う。(プリント①上参照)



(写真④↑) ※箱の保管の様子

て作品がよりリアルな表現となったり粘土以外の材料の工夫が出来ると考え、底とふたの情景を描かせた。(プリント①裏参照)

(←プリント①上) ※シチュエーションの記入

※「感動の箱を作ろう」  
 一年 組 氏名

○ 映画の一場面のような、シチュエーション(状況・場面)を考えたよう

① いつ  
 休日の午後(午後3時くらい)

② どこで  
 おしゃれなカフェ

③ だれと  
 友達

④ どんなところで  
 テーブルのあるテラス

⑤ 何を(どんな食べ物)  
 紅茶+洋かし

⑥ どのように(どんな食方で)  
 フォークなどを使って

⑦ どんな気持ちで  
 わくわくした気持ち

☆ 右のような状況が分かるような風景を考えてみよう。  
 \*人の姿が見えないのに、人の気配を感じる場面を考えてみよう  
 \*箱の「ふた」を開けたとき、見た人が感動する(心が動かされる)ものを作る工夫を考えてみよう。

(←プリント①下) ※材料の記入例

※ 家から持ってくるものを書いて見よう。

\* 時間が経つと変化してしまうもの、ふたが閉まらないほど大きいもの、壊れやすいもの、箱が変形するほど重いもの、高価なものは「箱」に入られませんが、家にあるもので使えそうなものを書いてみましょう。

リボン  
 ビーズ 白・黒・オレンジ  
 布 緑・赤  
 フェルト ピンク・茶・緑  
 画用紙  
 おりがみ 単色  
 紙ねんど  
 紙皿

(先生が用意するものは、袋の紙粘土だけです。回りを作ってから粘土で食べ物を作りますから、準備を忘れずに先に進まないで注意してください)  
 ・この用紙の裏にアイデアスケッチを描きなさい。作るものは、実物大の大きさに描きなさい。必要であれば、色鉛筆やクレヨンで色をつけてみましょう。後日、提出してください。評価に加えます。

(←プリント①裏)

※アイデアスケッチを記入したもの



④制作する

・情景を制作する。(写真⑤～⑥参照)

箱を完成させた生徒から、食べ物以外の背景を中心とした情景の制作からはじめさせた。生徒は、「食べ物」をどう作るかに集中し、先に食べ物を作ってしまう、箱に固定してから箱の底が着色できないことに気づく生徒もいるからである。色紙、レース、紙コップなど必要な物は自分で用意させ学校では特別用意をしなかった。そのため、紙粘土は用意したがこの時点では配付せず、どうしても背景に紙粘土が必要な生徒は自分で用意させた。

(写真⑤↓) ※背景を制作している途中の様子



・完成

・着色した粘土や色々な素材を組み合わせ、写実的な一場面を表現して完成する。(写真⑨⑩参照)

⑤鑑賞する

・制作途中(プリント②)と完成時(プリント③)に相互評価と自己評価を記入させ、記録として写真を撮る。

※(プリント②③(写真⑦))は途中と完成の自己評価用紙に写真を貼ったもの。生徒ファイルを撮影)



(写真⑥←) ※制作途中の作品の様子



(写真⑦←) ※プリント②③鑑賞カード

### (6) 反省と今後の課題

・表現の多様性に応じられるように、薄く伸ばせる紙粘土を用意したが、重さと色に問題があった。次年度は、白くて軽い紙粘土の使用を検討している。

- ・参考作品が、ケーキの作品だったのでケーキやハンバーグなど材料を加工する食品が多くなってしまった。野菜や果物など素材の美しさを表現するような作品を作る生徒が増えるよう、導入での工夫を考えたい。
- ・紙粘土以外の材料を生徒達は沢山用意できたが、材料の使い方が一般的で、あまり発想の広がりを感じなかった。紙粘土以外の材料を、もっと柔軟で奇抜な使い方が思いつくように助言や援助をしたいと思う。教師側である程度の材料を準備すると、用意された材料に頼ってしまい、自分での準備をしない生徒が増えてしまうので、材料の多様性を考えて材料の準備をしなかった。
- ・生徒は失敗を恐れ、やり直しを嫌がっている様子がみられた。一通り完成してしまうと更により良くする方法が見つからない生徒も多い。失敗しても努力を正確に評価し、生徒が安心して制作にチャレンジ出来る環境が不十分だったのではないかと反省している。
- ・5 cmしかない厚みをもっと逆手にとって、箱に紙粘土で作った食品の続きを描くなどトリックアートの技法をもっと取り入れられると、表現の幅が広がると思う。好きな食べ物を作ることは熱心だが、見る者をもっとびっくりさせようとか、もっと感動させようといったアイデアを突き詰める意欲がまだ不十分であると思う。助言の仕方に工夫が必要であると反省した。



(写真⑧←) 完成作品



(写真⑨←) 完成作品